



nanako-fifteen

II

第三章

能力や情熱以外のところで  
道が閉ざされた口惜しさ

a.minemura

## nanako-fifteen II

登場人物

3・能力や情熱以外のところで道が閉ざされた口惜しさ

041.

042.

043.

044.

045.

046.

048.

049.

050.

あとがき

奥付

## 登場人物

間宮 ひろ	高校二年生 陸上部で活動中のスポーツ少女
桧山 健	大学生 ひろと同じマンションの住人
新城 富夢（とむ）	(株)新城不動産の社長でマンションのオーナー
新城 なおみ	新城不動産の専務 社長夫人
権田 トオル	高校生 柔道部と華道部の両方に籍を置いている
河合 ヤスオ	高校生 陸上部のマネージャー
河合マスター	ヤスオの父 お好み焼き屋「かわい亭」店主
間宮宮司	ひろの父 神社の宮司
ななこ	記憶喪失の幽霊

### 3・能力や情熱以外のところで道が閉ざされた口惜しさ

041.

「ひろ……？」

低い声がやさしく呼んでいる。

「ひろ……」

低くやさしい音の背後には叡智と深い悲しみが潜んでいた。嘆きと後悔、憎しみと憤りの中に身を置いて、あらゆる負の感情を受け止めてきた者の叡智と悲しみ。

この声の前ではどんな悲しみも比較にならない。大きな波のうねりの中にたつ小さなさざなみ、ひろは発作のようにしゃくりあげながら、心のどこかでななこと自分をそうたとえていた。

「……ひろ……」

彼女はいったいなにを見てきたのか。

どんな悲しみをも受け止める計り知れない悲しみはどこからやってきたのか。その根源はあまりに深く、まるで地の底とつながっているようだった。

ななこは嘆くひろの背を手で撫でさずかわりに、その声で慰撫した。

彼女の声はひろの魂をそっと包み、慰めようとしていた。

それは口頭とする慰めとは、明らかに違うものだった。

ひろは帰ってくるなり通学用リュックを背負ったままベッドに身を投げ出し、子供のように声をあげて泣きじゃくった。

ひどい、と思った。

桧山の言い種は、あんまりだった。カーテンとベッドカバーを譲ってもらった時に、ひどく機嫌が悪そうだったが、あんな邪推をめぐらしていたとは！

ひろは泣きながら、ななこにそう訴えた。訴えるついでに、口をきわめて桧山をののしり、今までの鬱憤をぶちまけていた。ぶちまけ終わると、今度は自分が口にした悪口雑言の数々にうんざりして、また泣けた。しまいにはなにが悲しかったのか自分でわからなくなった。

ななこがそばにいなければ堂々巡りをくりかえしていつまでも泣いていたに違いなかった。

しゃくりあげる発作がおさまり、いくらか気持ちが落ち着いてから、ようやくひろは思い出した。

「あたし、ひどいこと言っちゃったよ」

「……なんて？」

「地獄に落ちればいい、って」

「……ひやまさんに？」

「うん」

「それはちょっとひどいわね」

「……だよ。あいつ、ほんとに落っこっちゃったらどうしよう……」

「だいじょうぶよ、そんなかんたんに落っこちるとこじゃないもの」

「ほんと？」

「ほんとよ」

本当に安心したそぶりを見せるひろを、ななこは微笑んで眺めていた。

「彼はだいじょうぶよ。落ちたりしない。あなたがいるもの」

ななこはそうつぶやいたが、ひろは涙をかむのに忙しくて聞き逃した。

「ん？　なんか言った？」

「彼は、あなたのことが気になってしょうがないみたいね、って言ったの」

「え？」

「だって」とななこはしわくちやになったベッドカバーを手でたたいてみせた。

「そうでなきゃ、あなたが二股かけてる相手にやきもち焼いたりしないわ」

「へ、へへへへんなこと言わないでよ！」

「ぜんぜんへんじゃないわ。あなたの相手が自分、ひやまさん自身ならうれしいってはっきり言ったんじゃない」

「——そうだっけ？」

「そうよ」

ひろは反射的に両手を上に挙げてしまった。ななこの目線に気づいて、あたふたと手をおろす。

「わかりやすいひとねえ」

ななこはおかしそうに笑った。

## 042.

「わたしね、これすごく気に入ってるの！」とななこは言う。「このおかげで元気になれるわ！」

ななこのお気に入りとは淡いグレーのファブリックのことで、そのカーテンの前に立つと、黒髪と白いセーターのななこはモノクロのスクリーンの中の妖精そのものだ。

白い小花の群生の背後に、灰色の唐草の森。

カーテンのわずかな隙間から射し込む光は森のはるかな上空からの天の恵み。

その下に心もとなげな風情の妖精が、冬服に縛められたようにうずくまっている。

萌えたつ7月の夏の色彩の中から帰ってくるひろには、自分の部屋ながらそこは実在する異郷に見えた。

本人がいうように、ななこは最初に現れたときよりもいくぶん元気になり、生き生きしてきたようだ、とひろは思った。

ゆうれいが元気になるとか、生き生きするとかいうのもおかしな話だが。

「ここは気持ちがいい」とななこは形のいい頭をかたむけてカーテンにおしつめた。

「これはいのちのかたち」指先が植物の蔓のような曲線模様をたどる。「これが私に力をくれる」

「ふうん……？」やはり妖精はいうことが違う、とひろは感心した。

「かたちが力をくれるの？」

「そう。とてもとても遠くから、このかたちを通じて力がやってくるのがわかるの」

「はあ」

「ごめんね、ひろ。どう説明していいのか私にはわからない。言葉では説明できないわ……」そして、「この花、かわいい」と話題を変えるななこ。

ひろが買ってきたかすみ草はすでに水をあげなくなり、花を下にしてドライフラワーに生まれかわりつつあった。初夏のマンションの一室は昼間かなり高温になり、生花は長生きできなかったのだ。ひろはそのことを詫びた。

「いいのよ、そんなこと。私この花、好きだわ」

ドライフラワーは死にゆくいのちだ。

カーテンに描かれた絵柄から力をうけとれるというななこの言葉にしては、どこか矛盾している、とひろは思った。

おそらく、ななこなりの、ひろへの心遣いなのだ。あなたの気持ちがうれしいのだ、という。

記憶をあらかた取り戻し、彼女なりに心中の整理がついた時、ななこはこの世を去るのだろう。そう思うとひろはやりきれない気持ちになった。もっといっしょにいて、もっとたくさん語り合いたいと、そう願わずにいられない。

だがひろ自身にもそうは言っていられない事情があった。

ひろの事情というのは陸上部の夏休み中の合宿だった。二週間、部屋を留守にしなければならなくなるし、合宿先までななこがついてくるとは思えなかった。どちらにしろ、その間、ななこは会えなくなる。

「私は平気。ぜんぜん大丈夫だから」

夏の昼間、ゆうれいがどこで何をしているものか、ひろは気になったが、ななこ本人にもわからないらしい。

「気がつけばあなたと話してる感じね。昼間のことは覚えてないのよ。たぶん寝てるんじゃないかしらね」

通学と部活に明け暮れるひろには想像しがたいことではあったけれども、本人が退屈してないなら、いいや、ということにした。

桧山から「二股かけられても嬉しくない」というセリフをひきだしてしまったひろは、なんであんな展開になっちゃったんだろ、と考えてみた。

ただ無性に彼が心配になって、行かないでほしいと言うつもりだったのが、やたら感情的になっちゃったんだよね、と思う。

——だから彼は告白されたんだと勘違いしたんだ、でも、だからってって自転車投げつけることなかったわよね——

落ち着いて振り返ってみればどうもそういうことなのだが、いまさら、あれはそういうことなのよ、なんていえるものでもない。

ひろにしたところで、桧山のこれまでの一連の反応が嫉妬からきているのだと解き明かされれば、まんざらでもなかったのだ。それどころかななこの前で万歳してしまったではないか。

——てことは、あたしはもしかして、桧山さんが——、なのかな？

自分の胸中とはいえ、そう言葉にしてしまったひろはからだか熱くなるのを感じた。

——どうしよう——もうまともに顔がみれないよ！！

同じころ、別のフロアの同じ作りの部屋で、桧山もまた同じようなことに思い至っていた。われながらバカなことを言ってしまったという後悔もあった。

よくよく思い出してみると、ひろはやたら感情的になっていたが、告白されたわけでもなんでもない。なぜか口からするりと出てしまったのだ。

——あのねっかえりが気になってしょうがなかった。なにかにつけていじめてやりたかった。しっぺ返しをして泣かしてやりたかった。

——つまり、「そういうこと、か……」

まるでガキみたいだ、と楡山は思い、苦笑した。

同じ建物に住んでいれば顔を合わせないわけにもいかず、それから数日の間、ふたりはすれ違うこともあれば鉢合わせすることもあった。

傍からみればおかしいほどそのたびふたりはぎくしゃくしていた。

ふたりの間に何かある、と周囲に思わせるものがあり、そうすることでたがいの胸中を告げあっているようにみえた。

ひろの学校が夏休みに入り、合宿に集合する日の朝、楡山は集合地まで送る、とじぶんから言いだし、新城社長は二つ返事で社有車ではなく、自分のベンツを提供した。

乗りなれない社長のベンツを操りながら、大学の夏休み中はずっとバイトしている、と言葉少なげに彼は語った。

「おまえの合宿が終わるまでは何処へもいかない」

陸上部員たちは皆、スモークガラスの灰色のベンツに道を空け、ドライバーの顔をみてやろうという気を起こす者はいなかった。

#### 044.

雨の季節が明けると同時に高校も大学も夏休みに入り、ひろが合宿に出かけた数日後のひどく暑い昼下がりに。

「ごめんなさいよー」

(株)新城不動産のオフィス兼マンション管理人事務所のドアが開いて、男が入ってきた。

パナマ帽を手にし、派手なアロハシャツの背の高い男だ。男の背中で海に沈む赤い夕陽の前、ヤシの葉が官能的にそよいでいる。

「おやまあ！ 間宮のおじさん！」

「どーもー。久しぶり。富夢くん、おじさん、やめて。歳あんまりちがわないんだから」

おっとり言いながら、クーラーの前で香木製の扇子を取り出す。一度開きかけた扇子をぱたりと閉じ、アロハシャツの男は桧山をみて頭を下げた。

「どーも。おはつですな」

「桧山ちゃん、ひろちゃんのパパだよ」

「それにしたって、よくもまあ、バチあたりなカッコなさって」

新城社長のことばに間宮氏は胸をそらせた。

「バチあたりはないだろう、気に入ってんだよ、これ！ オフタイムにどんなカッコしたっていいじゃない……」

言いかけておいて、なにか気になるようすで事務所内を見回している。

「富夢くん、最近、変わったことない？ 商売うまくいってる？」

「商売ならうまくいってるよ。ウチの物件て八割がた学生さん向けでしょ、家賃はかわいいわが子のために親御さんがちゃんと払ってくれるから、滞納なんてほとんどないしね、今どきの学生ってわりとお行儀がよくてねえ、部屋もあんまり傷まないから修繕費もそれほどかかんない。……ねえ桧山ちゃん？」

「は。それに税金もちゃんと納めてます」

「なんなら決算書みせようか？」

「あ～いやいや。そういうことじゃなくてだね、その……テナントが夜逃げするとか、学生さんが身を投げちゃうとか」

「……ウチはそういうトラブルないよ。すくなくとも、ボクは聞いてない。桧山ちゃんは？」

「私も聞いてません」

「うーん……。そう……」

「ああ。おじさん、ひょっとして……そっち系？」

ひろの父は新城社長の問いに答えず、気持ちを切り替えるように言った。

「ひろの部屋に荷物を置いてきたいんだが」

「荷物？ 生ものだったらボクがあずかるよ」

「洗濯済みの下着」「それって生もの」

閉じられた扇子が宙を飛んで新城社長のおでこに命中した。

「あいた」

「あのおうちやく者、合宿先から洗濯ものをはじからウチへ送ってきおって！ かあさんもかあさんだ、合宿から帰ってくる前に下着だけは下宿に届けてやってくれときたもんだ！ そうやって互いに甘えあってるからわが国の崇高な家族制が衰退の一途を……」

古いのか新しいのか、軟らかいのか硬いのか、おっとりしてるのか神経質なのかよくわからない男だった。

「まあまあ、おじさん。ここは下宿じゃなくてマンションですってば。洗濯くらい、してやればいいじゃない、だいたい若い娘の洗濯物なんて、お金払って手にいれたい人だっているんだからさ」

「……そろそろほかの下宿先、探そうかなあ……」

「探せるもんなら探してごらんなさいよ。ウチよりいい物件なんて、この辺にありやしませんよ」

「物件が優良でも大家が不良ではなあ」

「さて、ひろちゃんとこのマスターキー……と。どれ、いっしょに行つてあげましょう。都会で迷子になるといけないですからねえ」

「人を田舎者扱いするんじゃないよ」

「不良呼ばわりしたのはおじさんのほう」

## 045.

娘の部屋へ足を踏み入れるなり、ひろの父、間宮宮司は見たこともないような美少女と対面した。

ななこは目の前にどんな魅力的な異性がいようが、自分は誰の目にも映らないのだ、という認識が習い性になっていて、玄関のドアが開いて誰かが入ってきたときにも、重たいまぶたをちょっと開いて無関心に宮司をみただけだった。

彼女は満腹の猫のようにひろのベッドに長々と寝そべり、うとうとうたた寝をしていた。

見知らぬ男の目が自分からそらされず、それどころか食い入るように見ているとわかって、ななこは反射的に飛び起きた。ベッドの上に正座し、スカートを直し、くしゃくしゃになってしまった髪を大慌てで両手でおさえて整える。

見知らぬ男はななこの挙動をまじまじと眺めていた。

気まずいといったらなかった。気まずいというより、とても気まずいかもしれない……と、ななこは正座の体勢のままにじって後ずさりしようとした。

(.....どうしよう！ だれなんだろう、この人！ ゆうれいにも身の危険であるのかしら！ .....ひろ！ .....ひろ！！)

後ずさりしたいがなぜかからだ動かない。.....ぴくりとも動かない！ 金縛りにでもなってしまったようだった。

その時、玄関ドアがノックされ、ついで外側へ開き、桧山の声が呼んだ。

「社長！」

男のあとについていっしょに室内に入ろうとしていた新城社長が振り返る。

「なによ」

「ちょっと」

「はいよ？」

新城社長が部屋から出て行くと、男はほっと息を吐いた。同時にななこはからだ元通り、自由になったのがわかった。

「社長、銀行の融資課の人が来てますよ」

「ああっ！ いかん、忘れてた！！」

社長はマスターキーを押し付けて「ロック頼むよ」といいながら転がるように廊下を走って行った。まるでネズミのようだ、と後ろ姿を見送ってから、桧山は部屋に入ろうとした。

「.....どういう事情かはよくわからんが.....ここは娘のためにわたしが借りてる部屋なのだ。同居はちょっとご遠慮ねがいたいものだね」

(.....独り言？ それとも誰かいるのか？)

間宮氏はひろの机の上でさらさらとなにか書いてから顔をあげた。

「ああ、お待たせしてしまったね」

「私は戸締りとガスの元栓を確認します。先にどうぞ」

間宮氏はひとりで入室しようとする彼を少々、気遣わしげにみていた。しかし、ゆうれいがいるから入ってはいかん、とも言えなかった。

「うん。じゃ、先に失礼するよ」

ひろの部屋は以前見たときとはすっかり様変わりしていた。

モノクロに統一された色彩はひろに譲ってやったカーテンとベッドカバー、そしてテーブル上に白い花。

ななこの目を慰めようとひろが買ってきたカスミ草のほとんどはひろ自身が押しつぶしてしまったり、残りはドライフラワーになっていた。ななこはそれでもいい、と言ったのだがひろは清潔な白にこだわった。期末試験が終わって合宿入りするまでの十日ほどの間に、ひろは細かなカスミ草の造花を手作りしたのだった。一抱えほどもあるそれは薄緑色のオーガンジーのリボンで束ねられ、テーブルにさりげなく置かれていた。

厳肅なようできてどこか愛らしい、それはふしぎな空間だった。

## 046.

厳肅なようできてどこか愛らしい、ふしぎな空間――

そこでは高校生の日常生活ではなく何事か儀式が執り行われているような、ふしぎな雰囲気まで漂っていた。ひろはここでいったいなにを考えているんだろう、と桧山は思った。

前、といってもつい最近のぞいた時はこんなではなかった。

よくわからんやつだ、と桧山は思った。

(なにかに、かぶれた、んじゃないだろうな……)

勉強机の上にレポート用紙が開かれていて、鉛筆の走り書きがあった。横書きの罫線は無視した達筆な縦書き。ひろの父がさっきなにか書いていたのはこれだ。

『これはおまえの手にあまる。父が手を貸す。乞う。連絡』

一階のオフィスにはなおみ専務がいた。社長は奥の応接で銀行の融資課と熱心に話し込んでいる。

間宮氏は冷たい麦茶を喫しながらなおみ専務としばらく近況のやりとりをした後、「用は済みましたのでね、帰りますよ」と立ち上がった。

「あらもう？ 富夢(とむ)さん、すぐ手があきますわ、もうちょっとごゆっくりなさってくださいな」

いや、と間宮氏はパナマ帽を胸に当てた。

「また来ます。たぶん近いうちに」

なおみは、そうですか……とつぶやき、駅まで送ってやってくれないか、と桧山に言った。

屋下がりの空には白い雲が浮かび、遠くに入道雲のきざしが見えていた。風も出てきて夕立がきそうだ、というようなとりとめもない世間話を桧山は間宮氏と交わした。

間宮氏は、湖岸公園で降ろしてくれ、と言った。そこから駅まで歩いてすぐだし、風にあたって歩きたいのだ、と。

桧山は間宮氏の希望どおり、公園の駐車場に車を入れた。そこは遊覧船乗り場に近く、一帯は夏の観光客でにぎわっていた。

「やあ。いい風だよ」間宮氏は車を出て、いかにも気持ちよさそうに言った。

桧山も送ってきたお客を見送るために車から降りた。

「ほんとだ。いい風ですね」

湖面を涼しい風が渡り、ふたりはしばらくいっしょに風に吹かれていた。

「しかし、なんだね」

「は？」

「あれねえ、なんとかならんかねえ、田舎の観光組合のセンスなんてあんなもんだろうが、行政も一体、なにを考えておるのかね」

間宮氏が指差しているのは遊覧船だ。

「はあ。あれがなにか？」

「そりゃ、たしかにここは、別名、竜神湖だがねえ、竜のかたちの遊覧船とはねえ！」

「はあ」

「それにこの音楽！」

遊覧船乗り場で大音量で流している音楽が風の合間に聞こえてくる。

「ああ、たしかに音、大きすぎますね」

間宮氏はなにか流暢な横文字を曲にあわせて口ずさんだ。

「これはねえ、アメリカのフォークソングだ、日本製じゃない。竜と少年の交流を詠ったものだが、だからといってなんでもかんでも竜神湖とくつつけられてはたまらんね！ 客集めのためならなんでもやっちまおうってことなんだろうが、竜神様のバチがあたってもわたしは知らんよ」

間宮氏はけしからんことの数々をおっとり口にしていて、一見おっとりしているが、案外こだわりが強く頑固な人かもしれない、と思いながら、桧山はてきとうに相槌を打っておいた。

「また来るよ。たぶん近いうちに」

なおみ専務に言ったのとおなじことを言い、帽子を胸にあてて頭をさげ、間宮氏は飄々と去って行った。

湖の風にふかれて間宮氏が去っていくのをしばしばんやり見送っていると、携帯電話が鳴った。

パンツのポケットから引っ張り出そうとして指を生地につまみ、電話機は足元に落っこちた。案の定というかなんというか、相手は新城社長だった。

社長は桧山が車で出かけたのをこれ幸いとばかりに用事をあれこれ言いつけた。

桧山は急に出かける際であっても、仕事の資料だの印鑑だの経費立替用の現金だのをしっかり揃えて持っている自分の手回しのよさを呪った。意識しているわけではないが、ごく自然にそういうことができているのだった。ふらっと出かけても仕事になってしまうのだ。新城社長が思いついたように急にあれこれ言いつけたくなったり小言を言いたくなるのも、桧山の手回しのよさと対応の的確さのゆえだった。社長は——これはもしかしたら掘り出しものかもしれん！——と思っていたのだ。

桧山が社長の要求にどれくらい対応できるものか、ひとつ見てやろうというひそかな目論見を知っているのはなおみ専務だけだったが。彼はひろが思うほど不器用な人間ではなかった。彼が不器用なのはひろに対してだけだということに、ひろが気づいていないだけだったのだ。

あれこれ言いつけられた用件をひとつずつこなし、振り出し地の湖岸公園に戻ってきたのは、日はまだ高いが夕刻時だった。

用事が済んで帰社しようとしている時にまた電話が鳴って、手近な駐車地はないかと目で探したらくだんの公園だったというわけだった。

車を止め窓を開けると、となりに駐車していた車中の若い二人づれににらまれた。しかたなく場所を移動して着信をみると、案の定というかなんというか、相手は新城社長だった。

「あー、もしもし桧山ちゃん？ 今どこ？ え、湖岸公園の駐車場？ そりゃちょうどいいや！！  
なにがってさっき、ひろから電話があつてさ」

駅についたばかりだというのだ。

「え……？ 合宿はあと一週間くらいあったんじゃ……？」

「うん、なにかトラブルがあつて取りやめになったとかで、帰ってきたみたいなんだ。桧山ちゃんそこにいるならちょうどいいや、拾ってやってよ。ボクが許す！」

許されるもなにもなかったが、社長は桧山が「は……」と言っている最中に電話を切ってしまった。まもなくひろが携帯電話片手、荷物片手に公園に現れた。

駐車場に新城不動産のロゴのついた車を見つけ、桧山をみとめると、驚いたような嬉しいような微妙な表情をみせた。

「……桧山さん？ あれ？ 私、おじさんと電話してたの。だからおじさんが迎えに来るんだとばかり」

「ああ、ちょうど近くを通りかかったんだ。それで、社長に迎えを頼まれた」

そうだったの、とひろはまぶしそうな顔をした。

「で？ 合宿はもう終わったのか？ 聞いてた予定とぜんぜん違うようだが」

「そうなの！ 予定とぜんぜん違うのよ！」

ひろは憤懣はんぶん、疲れはんぶんな様子で言い、肩から荷物をおろして地面に置いた。桧山はトランクをあけて車に積み込んでやる。

「ありがと。——おとといね、部のOBのひとたちが……去年の卒業生ね……食料の差入れにきてくれたの、がんばれって。そこまではありがたかったんだけど、その晩、うちのOBとよその学校のOBがケンカになって、ケガ人がでちゃったの」

「ふーん」

「合宿所でよそとケンカしてケガ人とはなにごとだって、ことになって」

「そりゃそうだろう」

「ケンカの原因を追究したら……」

「……」

「OBの人たちがアルコール持ち込んでたことがわかつちゃったの。合宿所で宴会開いてたOBたちがいて、そこに一年部員が何人か混ざってた」

「……」

「今年は春先から調子悪い人多くてね、夏の合宿で盛り上げて秋からがんばろうって、みんなで話してたの！ それなのに——」

「おまえが毎朝ロードワークやってたの、知ってるよ」

ひろは、えっ、と顔をあげて桧山をみた。

「ほんとに、走りたくて走ってるやつなんだと思ってた」

ひろは顔を伏せた。

走りたくて走ってるのは本当だった。桧山がそう思っていた、というのはちょっと意外だった。

走る能力や情熱以外のところで道が閉ざされた口惜しさと、桧山の思いを知った嬉しさで鼻の奥がつんと痛かった。涙があふれそうだった。

「——ちょっと涼んでこうか」と桧山は言った。

夕刻時の湖岸公園は、近くの観光ホテルから夕涼みに出てきた人たちがそぞろ歩いていた。夕立になりそうだった入道雲はいつのまにかほどけてしまい、空の端に薄く広がっていた。

水と夏の風の匂いと、針葉樹のかすかな香りが慰撫してくれるのを、ひろは夢見心地で感じていた。

ななこは声ではない声でひろの魂に語りかけてきたが、桧山は嗅覚を通してひろの記憶を刺激してくるようだった。ひどく、懐かしい。

湖の上に広がる空は夕立に至らなかった雲の断片が広がり、夕焼けの様相を見せ始めていた。

陸上部の合宿の中止はひろをえらくへこませたが、そのかわりに思いがけない幸せなひとときを設けてくれもした。

今日の仕事は全部終わっているし、「ひろを拾ってやってくれ」と社長のお許しも出たことだし、と桧山は都合よく解釈した。

時間が許すかぎり、ひろと話そう、と彼は思っていた。こんな機会は二度とこない、なぜかそんな気がしてならなかった。

この幸せな時間がすぎれば自分は行かなければならないのだ、どうしても、とほとんど脅迫観念のように彼は考えていた。日本を離れ帰郷してしまえば、もう戻ってくることはない、なんの根拠も理由もなくそう思いつめていた。

なんでもないとりとめもない会話が心を満たしてくれることを久しく忘れていた、と桧山は思った。かつてそんな幸福をくれた美少女は三年前にこの世を去り、届かない時間の中に眠っている。彼は奈々子の眠りを侵さぬよう、彼女を忘れようとし、怠惰な生活も奔放な生活も経験してきた。

だが奈々子のいない日々、奈々子ではない女の子たちは、結局、否定された奈々子、奈々子の亡霊だったのだ、とふいに思い至った。

怠惰な日々と奔放な日々とを積み重ねなければ、今こんなところにいてひろと語り合うことはなかったのもまた、本当のことだった。奈々子が去ってからの紆余曲折はすべてひろに出会うための回り道だったのかもしれないとさえ思えた。

——奈々子、と彼は心の中で語りかけた。

——おまえの亡霊がひろに巡り合わせてくれたということなのかな。だとすれば、おまえに感謝しなければ

ありがとう——と彼は三年前の奈々子のイメージに向かって礼を言った。

そうすると、すっかり胸のつかえがとれ、晴れ晴れとした気分になり、ひろの急な帰着で失念していたことを思い出した。

「そうだ、ひろ、今日、おまえの親父さんが——」

#### 049.

ひろはあやうく声をあげそうになった。

傾いた陽が空をうす赤く染め始める夏の夕、そぞろ歩く人々の間を少女が歩いてくる。

開放的な水辺の観光地を楽しむ軽装の人々の中、少女はダッフルコートにロングブーツという真冬のいでたちだ。

——ななこ？

ななこは誰の目にも見えてはいないはずだ。真冬のコート姿を振り返る者はひとりもない。彼女は部屋の外へ出るときはいつもこんな格好をしているんだらうかとひろはふと疑った。

まるで——決戦か出立か、いずれにしても、意を決した——重装備に身をかためている観があった。

ななこは黒目がちの目でひろをとらえ、まっすぐに歩いてきた。

そういえば、とひろは今さらのように思う。いつもマンションのそう広くない部屋で顔をつきあわせていただけのななこだった。彼女が歩いているところを見たことがなかった。

ボリュームのあるコートを着ているにもかかわらず彼女の足取りは軽く、髪をかきあげるちょっとした動作はこの上なく優雅だった。

頭を傾け微笑みかけてくる既に見慣れたしぐさに、ひろは動悸が高まるのを覚えた。

——どうしたんだらう？ こんな時間に。こんなところで

問いかけたかったが、ひろのとなりには桧山がいた。

「そうだ、ひろ、今日、おまえの親父さんが——」と彼が言っている。

「——え。お父さんが！？」

「ああ、二時くらいだったかな。管理人事務所に見えたんだ。おまえの部屋に入りたいから鍵を貸してくれと——」

ひろは思わず息を呑んだ。

「お父さん、私の部屋に入ったの！？」

「ちょうど社長……管理責任者がいたからな。親戚同士なんだろ？」

「そ、それはそうだけど。お父さん、部屋に入ったのね！？」

ひろは父の突然の来訪を歓迎しているのかそうでないのか、どちらかといえば、そうでない反応をしている、と桧山はなにか不審なものを感じた。

「ああ、社長といっしょに。途中でオレが社長と交代した」

ひろは、うっ、という顔をした。

「桧山さんも！？」

「ああ。入ったっていったって、社長が鍵を開けて、オレが異常がないか確かめて閉めた。——なにかまずいことでもあったのか？」

うん、とあわてて頭をふる。新城社長も桧山もなにも見ていないのだ。だが、父、間宮宮司はもしかしたら——

——そうなのね？ あなた、うちのお父さんに会ったのね？

ひろはななこを見て目で問いかける。ななこは、そうだ、とうなずいた。まだ陽のある時間にななこが部屋をでてきたのは、そのことと関係があるに違いなかった。

桧山はひろの目の動きをなんとなくみていたが、彼女の目線の先にはもちろん、なにもない。

「なあ、ひろ。オレ、ちょっと気になったんだが……」

「あ、はい？」

「おまえの部屋……おまえの留守中に誰か出入りしてないか？ うちのマンションはセキュリティしっかりしてるから、それはありえないはずだが」

「そんな——そんなことあるわけじゃない！ なんでそんなこと言うの！？」

ひろが飛び上がるような反応をしたので桧山の不審はさらに膨らんだ。

「いや、なんていうか——留守の部屋じゃないみたいだったから。誰か出入りしてるか、住んでるか、そんな雰囲気——」

言いながらふと思い当たることがあった。ひろの父がなにか言っていた。同居は遠慮してくれ、というようなことを。

桧山はひろに向き直り、正面から顔をのぞきこんだ。

「部屋の雰囲気も前とぜんぜん違ってたし、ちょっと心配なんだ」

桧山が上げた右手はひろに触れなかった。ひろがふっとよけたのだ。

「心配ってなにが？」

桧山は手のやり場に困ってしかたなく引っ込めた。

「おまえがなにかトラブルをかかえているんじゃないかって」

ひろはとまどいながらふるふると頭を横に振った。今目の前にいてなにか言いたげなななこをどう説明していいのか、考えもつかない。

夕陽がななこを素通りして斜めに差し込んでくる。西からの光。

逸らしたまなざしをあらぬ方向へむけているひろを見ているうちに、桧山は怒りのような感情がこみ上げてくるのを覚えた。

こいつは人の話を聞いていないのか！？

それはきつい声音としてひろに向けられた

「じゃあ、管理人事務所としてたずねるが、おまえの部屋、同居人がいるんじゃないだろうな？」

ひろはそれをまったく聞いていなかった。

いや、耳には届き、桧山が以前のように不機嫌そうな物言いをしているのはわかったが、それどころではなかったのだ。

## 050.

——ひろ、わたしね、全部思い出したの。思い出せたのよ。

ななこの声がそう語っている。

——あなたのお父さんに会ったからだわ。あなたのお父さんがわたしの眠りを覚ましてくれた。わたしはずっと眠ったゆうれいだったのよ。思い出さなければならないのに思い出したくなくて、ずっと立ち止まったままだった。

(ずっと立ち止まった？)

桧山がこの間同じことを言っていなかったか？

ひろはななこの黒髪の耳元に白い小花が飾られているのに気がついた。部屋のテーブルに置いてきた造花だ。ななこは髪に飾ってくれたのだ。

ななこはからだを巡らして湖の沖を指さした。

その方角には、小さな島がある。小さいながら古木が生い茂り、古い石の祠があるという。小さな島。昔は船着き場があったらしいが、今はなく、誰も立ち入ることはできない。ななこはそれを指さしたのだ。

桧山が業を煮やしてひろの肩をつかんだ時、ひろは自分の目を疑っていた。

ななこの髪がふわっと浮き上がったように見えた。同時に白い小花の飾りがほどけ、黒髪全体を覆ったようにも見えた。

ななこが素足で公園の石畳に立ち、ゆっくり水際へと歩いていく。

湖面で乱反射する金と橙の光の中をななこがゆっくり水際へむかう。永い停滞に別れを告げるように。

ダッフルコートは羽衣のように軽やかな素材を思わせて背後に流れ、見慣れた冬物のセーターは優美なドレープを湛えてほっそりしたからだにまとわりついている。

それはモノクロの映像が実はフルカラーだったと種明かしされ、特撮をスローモーションで見ているようだ、と、ひろはしびれた脳裏で思いめぐらしていた。

ひろがあっけにとられて見ている前で、ななこは誰か別人に変身してしまった。金と橙の光が乱舞する中に異世界の衣装をまとった美少女が立ち、細い黒髪をこの世のものではない風になぶらせていた。

ひろは思わず、あなたはだれ？ と尋ねた。美少女は振り返ってひろを見、なにか言った。優しい微笑の向こうには深い叡智と深い悲しみがあつた。

3・「能力や情熱以外のところで道が閉ざされた口惜しさ」

4・「いなくなっちゃった！ 呼んでも帰ってこない！」へ続く

## あとがき

作中で間宮宮司が歌ってる『Puff, the Magic Dragon』は、ピーター・ポール&マリーというグループの曲で、歌詞といい曲の雰囲気といい、一度聴いたら忘れられない、なんとも抒情的。童謡といわれてもぜんぜんおかしくない。

昔、NHKのみんなのうたで尾藤イサオさんが歌ってた『サラマンドラ』も、抒情的な歌詞。

どうもドラゴンと人間とは、互いに棲む世界が違い、寿命も違いすぎる。けれど、感情的にとっても近くて、互いに惹かれ合う。そういう関係にあるようです。

2025年1月18日 記

奥付

nanako-fifteen II

3・能力や情熱以外のところで道が閉ざされた口惜しさ

2025年1月20日 初版発行

著者 峯村 明 [E-mail](#)

表紙素材 「[Designer](#)」

制作 Puboo

発行所 デザインエッグ株式会社